屋電車製作所を創立するに至つたのである、是より先き氏は高田博士の推薦する所となり日清生命保險株式會社の理事に迎へられ、更らに支配人に進み同社發展の爲めに全力を傾注し、日清生命をして三大保險會社の壘を摩するの盛況に至らしめ、又同志と共に日章火災海上再保險株式會社（資本金貳百萬圓）の創立を計畫して之れを成立せしめ監査役として今尙ほ同社に重きをなして居る、日章火災海上再保險株式會社は日清生命の姉妹會社で現に成績優良斯界に重きをなして居る會社である然るに大正七年に至り、氏は多年その肚裡に計畫せられたる事業にして我邦に於いては猶ほ着手せられざりし尤も文明な信托事業を經營する事となり、先輩友人と共に遂に貳百萬圓の資本金を以つて日章信托株式會社を起し專務取締役として玆に初めて理想を實現せしむるに至つたのである、吾人は氏の經路過去をふり返つて其の記述の甚だ粗雜粗漫なることを恥づるのである、然れども氏の如き多難、

多岐、奮鬪苦戰の人物の跡を詳かに歷述せんとすることは斯かる一小冊子の克くする所でない、依つて家庭に於ける氏、個人としての氏の一面を叙して擱筆しやうと思ふ。

氏は鄕土の兩親に對して二十年間一ヶ月も缺かずに扶助料を送つて居る、今日の氏に於ては事容易であるが十五圓位の薄給時代もあつたがその時でもその半額を送金して老を慰めたと謂ふ事を聞いても氏が如何なる人物であるかを想像する事が出來るのである、而して幼少時代より人生の行路難に遭遇し慘憺たる苦心を嘗めた人に有り勝ちな冷酷殘忍の思想なく涙と血に富み、自ら奉ずる薄く或は友人故舊の急に赴き或は苦學生を助け、後進を誘掖する事を忘れない、旣に氏の助けに依り慶應大學を卒業したものもあり、早稻田又は帝國大學を出で、旣に社會的に活動して居る人物もある、氏又母校の爲めに盡瘁後援する事怠りなく後進生の進路開拓の爲めに盡しつゝある如き其例枚擧に

遑がない、常に虛飾虛榮を排し堅實向上を旨とせられ自ら陋屋の窮居を甘んじ深く精神的生活を愛せられて居る、家庭は夫人佐登子を背景に長男國夫氏（早稻田大學高等豫科在學中）次男忠夫氏（京都府立第一中學校在學中）三男信夫氏（小學三學年）あり、何れも芬蘭の香高く常に春の如き家庭の團欒を見るのである。（了）

實業家 相馬榮治氏

氏は秋田縣北秋田郡鷹巢村の人である。氏の家は同村の舊家で祖父は又右衞門氏、嚴父は友吉氏と謂つた、成長するに及んで村立小學校に入りて學び、是れを卒業するや秋田中學校に入りて學び、尋いで笈を東都に負ふたのである、而して氏の家素と鄕土の舊家で富豪であるを以つて一家の資產經營といふ事に早くも着眼し是より此の方面に必

要な智識を吸收するに努力するのであつた、明治四十三年感ずる所あり斷然獨立し同年三月日本橋區蠣殼町一の一に米穀商品仲買業を初めたのである、是れより先氏は頗る該業に趣味を有し幾多の實驗を重ねたる結果、一に資本、二に經濟三に部下を有するに於ては必らず失敗する事無からむとの確信により、遂に開店を斷行するに至つたのである、氏が確信は果して誤らず十年の營業何等の蹉躓なく自助的發展を觀、今や店頭の顧客織るが如く、相馬商店の名聲は斯界に籍甚たるに至り、氏は容易に株式米穀界の成功者たるに至つたのである、氏の令閨は秋田縣土崎の豪家菅家の一族菅龜治氏の一女信子で本年十五歲の又治郎君を筆頭に七人の子寶あり幸福な家庭を現實し居らるゝ、又古川合名會社大阪支店長菅禮之助氏とは姻族の間柄である。（了）

日本銀行出納局長　水野重也氏

舊莊內藩の一隅より崛起して本邦財界の巨擘日本銀行の出納局長となり理財家として現代の財界に漸く重きを爲せるは水野重也氏其の人である、氏や梶原氏と共に舊莊內藩出身財界の双璧として異彩光芒を放てるもの、是れより少しく此の精英の歷程について記述して見やうと思ふ。

舊莊內藩の家老として水野家は最も古く且つ重きをなして居た、氏の先考は水野重剛、母堂は茂岡子、同藩士高力家より出でた、重剛氏は廢藩前は家老として一藩の政局に當り、廢藩後は閑雲野鶴を侶として子女の敎育に從事せられた。

氏は明治七年七月三十日を以つて呱々の聲を鶴岡馬場町溜池舊藩主

御分家邸の附近に擧げた、氏は四男であつた（令兄三人、令姉二人妹一人あり、凡て八人兄弟で氏は六番目に生れた）斯くて漸く長ずるに及び長陽小學校に入りて學び更らに莊內中學校に入り仔々五年是れを終つた、當時の同學生に住友倉庫東京事務所長角田貫次氏（同氏譚參照）などがあつた斯くて莊內中學を出づるや溫海小學、朝陽小學校等に敎鞭を執り、蜚かずまた飛ばざる事三年であつた、明治二十八年に至り深く感ずる所あり、蹴然莊內の天地を辭し初めて笈を東都に負ひ高等商業學校に入り明治三十三年これを卒業し更らに止りて專攻部（銀行科）に學ぶこと二年であつた、氏はいよ〳〵高商を出づるや玆に初めて日本銀行に入り、國庫局に勤め爾來明治三十七年十一月迄同局に在つた、これ氏が理財家としての振出で亦第一階級でもあつた、明治三十七年十一月日本銀行門司支店に轉じ日露戰爭中多端多忙なる地點に於いて奮鬪し明治四十年再び國庫局に轉じた、明治四十一年に至り

營業局に轉じ、同四十二年に至り代理店監督役附として倫敦在勤を命ぜられて渡英し大正元年四月に至り歸朝せられた、歸朝後調査局に轉じ大正二年日本銀行調査役となり福島支店に轉じ次席として活動し同年十一月本行文書局調査役となり大正六年に至つた、同年八月秋田支店創設の事あるや氏は七月支店長として秋田に赴任し爾來二年間該支店を主宰し、大正八年檢査部主事に榮轉して本行に入り、更らに累進して保井氏の後を襲ひ出納局長として今日あるに至つた。

想ふに氏が一條の徑路、垣々として平野を歩むが如く此間何等の奇に富まざるも、波瀾萬丈の歴程は理財家に執りて大禁物でその克く大を爲す所以ではない、讀者此點に深く留意すべきである。（了）

法曹家　兼子歡次郎氏

人物稀薄なる西村山郡谷地町より崛起して中央法曹界の檜舞臺に活躍する氏に對し著者は「谷地の人材甚だ少なきは何故なりや」と尋ねた時氏は斯う答ふるのであつた。

一時吾等の先輩二十餘名も東都に遊學せるが不幸にして中途學を廢し桑梓に歸り、爾後誘掖提撕の任に當りたるもの無かりし爲めのみ」と。

氏は更らに亦た一の理由を物語つた、それは谷地町が往昔、或部分ば松嶺、新莊等の藩領として又は天領等に屬せる部分もあつた所で、是れといふ學閥の如きものが無かつた爲めでもあろう、と。

遮莫、氏は明治八年七月を以つて呱々の聲を西村山郡谷地町に擧げたのであつた、嚴父は兼子金兵衞氏、氏は其の二男であつた（男四人女四人の八人兄弟）母堂は寒河江石川家の出でしん子と謂つた、斯くて長ずるに及び初等教育を谷地小學校に受けた、高等工業學校を出で

丶神戸市の外國商館に活動しつゝある石川弘藏氏、札幌農科大學を出で盛岡高等農林學校教授となり現にペリーに在る伊藤清藏氏、議會及び政黨論を著はし帝國大學を出で丶間もなく沒したる菊地學而氏等は何れも小學に於ける同期生であつた、氏小學を出づるや新聞記者たらむとする志あり、上京の事について是れを父兄に謀るも許されなかつた、當時同地方より他地方に遊學する事は非常に困難であつた許りでなく、先輩の多くは中途歸鄉したので東都遊學の一事に至りては殊に不評判であつた、是に於いて氏は決する所あり、明治二十七年遂に鄉土谷地の町をふりさげ見て徒步し山形に入り、米澤市を經、更らに鐵脚に鞭つて板谷峠の難を踏破し、福島に出で東都に向つたのであつた。

氏漸く出京せるも懷中素より一金を有するにあらず、又學資金の出所あるにあらず、眞に是れ空拳徒手獨立獨步何んの後援を得る事なく

して學業を修めなければならないのであつた、是に於いて初め私立學校の教師となり僅かに糊口の資を得、更らに教員檢定試驗に及第して準訓導となり正教員となり各小學校に奉職し富士見小學校に奉職多年、此間明治三十年日本法律學校に入り法律學を研究し明治三十二年同校を卒つた。

顧れば氏が單身鄉を出で丶より旣に五星霜であつた、明治三十五年判檢事登用試驗に應じて及第し同年十二月直ちに司法官試補として靑森地方裁判所に赴任し翌年三月感ずる所あり職を辭して上京し麴町區飯田町に辯護士事務所を開き爾來民事を擔當し專心一意斯業に從事し今日あるに至つた。

吁、頂天立地孤獨無援、空拳赤手にして東都に苦學し業を起し名を擧げたる氏の如き又是れ立志美談の一人者たるを失はない氏具さに東都に苦學し世路の辛酸を嘗め盡したるを以つて常に後進の苦學するも

のに同情し提斯誘掖を怠らず、曩きに谷地會を起しその指導者たる事八年、今猶ほ同會の牛耳を執り盡力する所少なくはない。

吾人此機會を利用して谷地の後進が本談を玩味し興起せんことを切望する。（了）

現住　日本橋區久松町三十一番地
電話　浪花　四六一〇番

三菱倉庫株式會社常務取締役　加藤義之助氏

財界の王國三菱株式會社の事業中最も權威ある三菱倉庫株式會社の常務取締役たる氏を記述する前提として其の嚴父加藤淑右衛門氏の事を記述する必要がある。

前記淑右衛門氏は、浪華消極の空氣に滿てる松嶺に生育した人乍ら、

早く時勢を洞察して明治維新後其の生活に困難せる舊士族の爲めに養蠶場を起して是等に授產し或は明治二年、酒田港に七十二國立銀行を起して金融事業の爲めに努力し又東京日本橋區小網町に酒田物產株式會社を創業し、從來莊內米の如き一俵だに東都に入荷せざるを開拓し盛んに國產米の販路を擴張し、澁澤、福澤（諭吉先生）豐川（良平氏）莊田（平五郎）諸名士と交はり、常に松嶺、酒田、東京間を往來しその識見、着眼の點に於いて時流を拔いて居た、殊に晩年是等諸名士を叩き意見を交換し調査研究に畢生の心血を傾倒したるは倉庫事業であつた、淑右衛門氏が倉庫業を起さんとしたには重要なる理由が存在して居たに違ひない、其の當時前記の如く七十二國立銀行を經營して居た關係上穀物等を擔保として金融するので勢ひ倉庫の必要當面に起り又倉庫なき爲め、巨額の米穀を燒失したる等の事ありて荷主貸主の損害の夥しきに鑑み、又莊內は米穀類の產地たる關係上大いに倉庫業の

必要を認め、同志を叫合せんものと其計畫を鄕黨の有志に說いたが一人として是れに應ずるものは無かつた、是に於いて淑右衞門氏は鄕黨の爲すなきを慨すること一再ならず、機會あることに是れをその愛兒義之助氏に說くのであつた。

話題はこゝに一轉せなければならぬ、斯くの如き人を父として、亦た喜久惠子を母堂として氏は明治二年十二月呱々の聲を松嶺町に擧げた、長ずるに及び松嶺小學校に入り、之れを卒はるや十三歲山形市第六銀行支店に見習として棲み込んだ、淑右衞門氏思へら自く分の銀行に奉口させれば彼れは頭取の子なりといふやうな譯で上役のものも遠慮して使役するので自然困苦を嘗める機會が少ないといふので他銀行に奉公させたのであつた、是に於いて氏は一年餘を山形に送つたがつら〳〵想ふにわれ何時迄か丁稚奉口に朽果つるを得ん、若し今にして發奮する所無くんば空しく此の田舍に埋もれんのみ、われも人、彼れ

も人、一つ東都に出でゝ奮鬪せんと、これを乃父に計つた、乃父も吾子の發奮を見快くこれを許し野澤組なる有名なる貿易業を起したる野澤源次郎氏の父君（大正七年沒す）が時々酒田に來り、乃父淑右衞門氏と交情を暖めて居たのでこれを野澤氏に相談すると野澤氏曰く發奮大いに可也、今後社會に起たんとすれば須らく學事に勵まざるべからず、余之れを世話せんとて快く氏の將來を引受け氏を同伴歸京したのであつた、想ふに加藤氏の今日ある上に於いて此の實業界の先達が提撕誘液する所あつたのは見遁すべからざる所である。

斯くて上京後氏は京橋仲橋に存在せる野澤氏の商店に入り丁稚として奮鬪する事一年、それより慶應義塾幼稚舍に入學した、氏時に十五歲であつた、その後機會を得て今の高等商業學校前身たる商法講習所に入學し明治二十四年高等商業學校を卒つた、而して翌二十五年一年志願兵として近衞第二聯隊に入隊した、明治二十六年に至り氏は今日

の運命を負ふべき第一歩を試みた、卽ち前記の如く乃父の倉庫業に對する志は何時か氏の精神に流れ込み高商在學中も倉庫業に對しては特に研鑽する所少からず、卒業後も引續きこれを調査研究して大いに趣味を覺ゆるに至つたのである、而して當時の倉庫業をして我邦に於て見るべきものは三菱系の人々が關係して居る東京倉庫株式會社あるに過ぎなかつた、謂はゝ當時日本の倉庫業はその草創時代であつた、是に於いて氏は斷然決する所あり、乃父の大志を繼ぎ倉庫業の爲めに其の生涯を献げんと決したのであつた、恰かもよし三菱倉庫株式會社に迎ひられて同社に入り、これより同社にありて劃策し、奮鬪して遂に副支配人となり累進して支配人となり大正六年遂に常務取締役に進み、我邦倉庫業の覇王ともいふべき該會社の幹部に列しこゝに初めて氏が多年の目的は貫徹せられ尤も得意なる境地を開拓するに至つたのである。

而して此間日清日露の戰役に會するや氏又劍を執つて起つた、日清役には近衞二聯隊附として臺灣に入り、蠻雨の間を往來し日露戰役には第三軍主計課に從つて滿洲に入り國事に努力し奉公の忠誠を致したのであつた。

大正六年、不幸にして大阪倉庫爆發事件に會するや社長岩崎小彌太氏に隨つて大阪に赴き、その前後策に參與し不眠不休の活動を續け、有名なる救濟金百萬圓提供に就いて氏も亦社長岩崎氏の果斷を補佐したことはこゝに呶々の言を要しないと思ふ。

吁、氏やその敎導者に賢父淑右衞門氏、提撕誘掖者に野澤卯之吉氏、先達に莊田平五郎氏の如き大人物があつて今日の成業に深い關係を有するとしても、一銀行小僧の發奮あるにあらずんば克く今日の地歩を得られたであらうか、それ發奮は成功の第一歩である、志ある青年は此の健實なる經路を參考としても決して過失ある譯はない。

附記　令弟淑郎氏（三菱銀行神戸支店支配人代理）は父方鈴木家（宮宿村釀造業）を繼承せり。

發明家　御法川直三郎氏

蠶病驅除に先鞭をつけ、蒸氣乾燥法の嚆矢となり、又蠶種機械を初めて斯界に提供し、蠶業學校を創設し、機關雜誌を創刊して斯界を誘導せる蠶業界の恩人秋田出身御法川直三郎氏の一傳を記述して見やうと思ふ。

氏は舊秋田藩士御法川林太氏の二男として安政三年七月を以つて秋田城下に呱々の聲を擧げた、其家は世々佐竹侯に奉仕し、移封と同時に秋田市に移住したのである、明治元年德川政府政權を朝廷に返上し、廢藩置縣の制に變じ士族は其の常祿を失ひ自營獨立の道を講ぜねばな

らなくなつた、明治六年に至り秋田の士族連の組織せる六德組なる一團體創設せられ其の加名者は百七八十名の多きに達し蠶種を製造し海外に輸出して居たが當時一枚の價は三兩といふ無比の高價で逐日發展し同八年に至り川尻組と改稱した、然るに組合中蠶絲の海外に於ける需要激增の際居ながら外商に奇利を壟斷せしむる不利を說くものあり、同年福澤諭吉翁の指示を受け大橋淡氏伊太利に赴き親しく蠶病驅除の術を研究し其の結果日本の蠶種にも又蠶病ある事を確認し佛國パスツール博士の蠶病驅除の方法及び顯微鏡を六德組に送り來れり、是に於て氏は是れ蠶業發展上の大問題にして一日も忽諸に附すべからざることを看取し秋田病院長吉田貞順氏に就き顯微鏡につき研究指導を受けたのであつた、是れ實に民間に於ける微粒子病卽ち蠶種病の驅除方法を講じた嚆矢である。

然るに前記パスツール博士の發明に依り猖獗を極めた伊佛兩國の蠶

病も漸く其の跡を絶ち日本蠶種の輸入を要せざるに至り、川尻組は忽ちにして西山落日の悲境に陷りついで解散した、於是明治二十年氏は微粒子病驅除の蘊蓄を極めん爲め東上し當時政府の創設に係り京橋橋山下町に在りし蠶病試驗所に入りて大いに研究する所あり、後西ヶ原試驗所に移轉するに隨ひて氏も亦た同試驗場に入り奮勵努力毫も倦む所無かつた、而して翌二十一年には本郷阿部邸に創設せる需給社に聘せられて微粒子病驅除法を講ずるに至つた、然るに當時國を擧げて蠶業の道頗る幼稚で大改良を要すべきもの多々あつた、殊に其の甚だしきは殺蛹の方法る頗る進まず、單に日光殺蛹と蒸殺蛹の二途に出でざる爲め、繭質を害するもの甚だしかつた、卽ち日光殺蛹乾燥に於ては色澤を損じ、解紓を不完全にして外皮を剝ぐの損害、不經濟を來したものである、又蒸して殺蛹し然る後影乾にする方法は少しく時日を經過すれば黴を生じ、色澤を害し、絲量を減ずる等の缺陷あり、殊に入

梅季に於ては二方法とも其の損害實に甚だしかつた、又福島、岩手等に於ては水氣の稀少な所に六尺四方の穴を掘り、炭火を以つて乾燥し其の上を莚にて覆ひ所謂穴蒸殺蛹の方法を用ひた、該方法は水氣を帶ぶことなく隨つて黴も多く生ぜずと雖も是れ又姑息なる乾燥法の一種で原料を改良して蠶絲本來の聲價を擧ぐる上に於ては餘りに遠いものであつた、氏は各地を巡視し此の原始的乾燥法の不完全なるを看破し、時勢に應ずべき產業立國策として斯くの如き傳習を蹈襲するの非を深く悟る所あつたのである、獨り此の殺蛹乾燥法が原料を粗惡にし、絲量を減ずるのみならず、常に天候の變化を憂慮し、絲質の成績如何を顧るの餘地なく時に價格の如何に係らずして是れを賣却するの窮境に陷り、製絲家は此の弱點を利用して安買をなし、天候の萬一を期して冒險的買占をなす等、彼我の不利、損失、弊害續出して居たのであつた、當時に於ては彼の富岡製絲場の如きさへ此の乾燥法以外に良策

なきものとして同一なる損害を受けて居たのである、是に於て氏は此の一大缺陷を補はんゝ爲めに蛹熱殺器を發明し明治二十一年初めて專賣特許第六二八號の該器を公にし、斯界の歡迎も亦た素破らしいもので忽ちに舊式乾燥法は其の跡を絶つた、當時專賣特許權を侵害するもの頻々相踵ぐも氏は毫も意に介せなかつた、然かも需要の急なる製造間に合はずして遂には商權のみを販賣する盛況を見るに至つた、明治二十五年に至り氏は蠶業界の機關雜誌として蠶業新報を發刊し斯業家の指鍼に供する等自費を投じて斯界に貢獻努力せられたのであつた、而して其の翌二十六年には製絲機卽ち四口繰製絲機を京都博覽會に出品して斯界の賞讃を博したるのみならず、畏くも皇后陛下の御買上の光榮に浴した、ついで氏は苦心慘憺の結果現今乾燥法の基礎とも謂ふべき蒸氣乾燥の方法を發明して是れを公にしたのである、此の乾燥方法に隨へば蒸氣を室內の鐵管に通じ、常に一定の溫度によりて繭を乾燥

するもので其の利便謂ふ許りなく、斯業家は悉く是れを應用して其の後れざらんことを努むるが如き狀態であつた、然れども氏は是れを以つて滿足せず明治三十二年更らに是れを改良して多管式乾燥機を發明し是れを斯界に提供した、多管式に隨へば從來の乾燥機により二十四時間乃至二十六時間を要するものを僅かに四時間內外にして乾燥することを得べく其の迅速、其の利便亦同日の比では無かつた、然るに當時多管式に對する世評は毀譽相半ばする狀態であつた、と謂ふのは番人等が四時間に乾燥する繭の交換に忙殺せられて非常の繁激となり其の結果乾燥過多の爲め失敗交々起るを多管式の責任に歸し彼の東北一の蠶業家佐野理八氏の如きさへ多管式に信を置かざること十年、世上漸く多管式に一變するに際して是れを採用するに至つたと謂ふ事である、然るに氏は多管式乾燥機にも猶ほ滿足せざるものあり、明治三十六年に至り自働乾燥機なるものを世上に公にした、而して是れを大阪

博覽會に出品するや賞讃湧くが如く、一等賞牌を授けられた、然るに氏は該機によつて乾燥する際、薄皮の殘留する繭を見るや發明道德を重んずる氏は自ら自働乾燥機製造を中止し幾多來つて是れを乞ふものあるも肯んぜなかつた、そして遂に一臺も製造せなかつたのである、同年更らに製絲機械四口繰を改良して六口繰製絲機械を發明し乾燥法普及と並び待つて大いに斯界に貢獻する所あつた、是れより先明治三十二年、氏は單獨私財を投じて小石川區戸崎町に蠶業專修學校を創設建築し後進青年子弟を誘導したのであつた、該蠶業學校は本邦に於ける嚆矢で支那及びシヤムより卒業生を囑望し來れるを以つて兩國に赴任せる卒業生も尠くはなかつた、當時一年間の經營費實に壹萬圓で同校は三十四年まで續き其失ふ所八萬圓に達したといふ事である、明治四十年氏は一轉して工業界の大問題たる燃料減少能率增進の目的を達すべき燃燒機を發明し是れを全國の有力なる諸會社工場に提供し海軍

鐵道院等にも試用せしめたるに其の效力絕大で曩には海軍に於て水雷布設艦に使用して成績良好なる爲め更らに六千噸の汲油持務船に使用して其の效果を認め各軍艦に使用するに決した、又鐵道院では三千二百〇四號の機關車に應用して效果を擧げたので各機關車に使用する事となつた、其の工業の發展を裨益し國家の富を增進する上に於て氏の發明は眞に權威と意義を認めなければならぬ。

而して氏は蠶業界を根本的に革命し斯界の大發展を實現する策として、蠶業家が相連合して小規模の乾燥設備をなし乾燥を兼ねなければ斯界積年の惡弊を一掃して製絲の大改良は絕對に困難であると主張せられて居る、今日一常習よりすれば製絲業者に利益を供給して蠶業家を犧牲に供しつゝあるの狀態である、抑も蠶業家が蠶絲改良の實を擧げんとすれば其の原料たる生繭を尤も適宜に乾燥せねばならないのは自明の理であつて今日の如く一週日以內に製絲家に轉賣せなければな

らない常習は恰かも未だ豐熟せざる青田を賣ると同一で、或意味に於ては苦心慘憺飼育の結晶を尤も大切な仕上げの場合に至りて放棄せると同樣で、斯くては折角苦心飼育の功を積む理由を解するに苦しむ。

而して製絲家は蠶業家が乾燥設備なき弱點と多年の弊習とを利用して安買をなし或は買占をなす等の事より價格相場の高落甚だしく加之、彼等製絲家は相場の如何により一時に多數の生繭を買込み之れを貯藏するに依り時に其原料を腐敗せしむる事あり爲めに不良品を製造する例決して珍らしからず、相互の不利、缺損は謂ふ迄もなく古來よりの斯かる情弊を放任するは蠶業界發展上誠に遺憾に堪えないのである、而して若し此の情弊を打破し蠶業家相協同して乾燥設備をなすに於ては其の乾操せる繭を貯藏して需要に應じて販賣することを得べく、是れを以つて一時金融の調達も容易なるべく製絲家も亦た其の必要に應じて買入れ一時に多數の繭を買込むが如き巨資を不要とするが

如き利便を生み、價格相場も亦た隨つて亂調子を帶ぶとなく比較的公正を維持し建實なる事業として發展するに至るは自明の理であると。

氏は斯くの如く主張せらるゝのみならず、百尺竿頭一歩を進め此の主張の爲めに今後一層の努力を惜しまれないといふ事である。(了)

明治貿易株式會社取締役社長
村井銀行監査役

松原重榮氏

天童藩内より崛起し苦學の結晶、苦心の權化ともいふべき慘憺たる徑路を辿り、偉大なる運命を開拓せる松原重榮氏を物語る前少しく氏の家系について記さねばならぬ、

氏は元治元年二月七日を以て舊織田藩領天童に生れた祖先は織田信雄公より出づるの秘系あるを以て藩主とは主從以上關係あり代々家老として藩政を掌り、嚴父重陽氏に至つた、重陽氏は夙に典經に通じ維

新後藩政を主宰して大參事を勤め廢藩後明治六年若松縣（舊會津藩）に聘せられて聽訟の職に就くや氏年齡僅に九歲、當時縣立の英學校に入り獨逸人ホーム氏に就て始めて英話を學ぶ明治九年縣政廢合の擧あり若松縣の福島に合併せらるゝや嚴父に從つて福島に移り後幾干もなくして磐城白河に轉じ故藩儒山下先生に就いて專ら漢學を修む、後福澤先生の學界に於ける盛名と人格とを慕ひ再び英學を完修せんと欲するの熱心、勃如として禁ずる能はず頻りに嚴父に切願して遂に其許諾を得、孤笈瓢然慶應義塾に入つた。

明治三十年の交、米國形紙煙草の世を風靡して一般上下の嗜好に投ずるや是が卒先創製者は村井吉兵衞氏であつた、而して此巨人を助けて其名を成し功を遂げしめたる者に至りては蓋し人多く之を知らず寡言沈默にして叨りに世の聞達を求めざる本傳の主人公松原重榮氏は實に其人である。

氏は明治十年始めて慶應義塾に入るや既に英學の素養ありしを以て琢磨の步武駿々として大に見るべきものあり屢々三田丘上なる先生紀念の演說館に其雄辯を振ひ又各新聞に投書して大に文才を試みた野澤源次郎、北川禮彌はその同期生である、明治十四年自ら期する處あり去つて伊勢新聞の聘に應じ暫く操觚の業に從事する事となり明治十五年原敬氏（現今の總理大臣）の知る所となりて同氏の主筆たりし大阪の大東日報に入社し更らに轉じて讃岐なる高松新聞の主筆に聘せられ紙上椽大の筆を振ふ事殆と年餘に及び社運爲めに大に隆昌を極むるに至りしも蛟龍遂に池中の物に非ず、恰かも原敬氏が清國天津領事に任ぜられたるを好機とし明治十七年支那漫遊の目的を以て先づ上海に航して文物制度より歐米租界狀態目に映じ心に觸るゝ處一として勇神皷舞の種子たらざるはなく、淹留數旬遂に原敬氏を追ひ天津に入つた。

後米國遊學の志を起し原敬氏に謀りて幾分旅費の內助を受け更に上

海にありて船便を待ちたるも貧生固より他に蓄積あるに非ず普通船客として渡航の資なければ當時淀泊の英國運送船「ストラズレヴン」號船長に切願して墨銀貳拾五弗を與へ貨物同樣のデッキバッセンジャーとなりて紐育に至らんことを請ひ船長が氏の熱誠に感ぜるの結果其一片の義氣に依りて明治十七年末、紐育に着することを得た氏は今日あるを以て全く其船長の厚意に基くものとなし感激の餘爾來毎年同船長に對し謝狀の發送を怠らざりしが暫くして、船も人も其存否明ならず轉た悵惘の歎に堪へずと常に人に話さるゝさうだ。

氏紐育に着するや第一に知友を尋ねたるも其人は數百里を隔てたる他洲の博覽會に出張して在らず然るに囊中餘す所の資金とては墨銀僅に貳拾五弗のみ之を米貨に換算すれば僅に拾八弗餘に過ぎず天涯友なく資なく凄愴の感果して如何なりしぞ兩來具に辛酸を嘗め食せざる事殆んど二晝夜に及びたる事あり遂に凋落して米軍艦ポーハタン號の給

仕人となり黑奴の間に介在して苦力勞働する事殆と半歲然れども獨立邁進の氣魄と向上榮達の精神とは此難關に處して益々倍加し來り氏が忍耐の結果は氏の辱交、故田中楠太郎氏をして遂に明治十九年に至り君を拉し米國ミネソタ州ミネヤホリス市に開業の雜貨店販賣掛たらしむるに至つた、勤むること一年大に小賣業に經驗する處あり明治二十年紐育市に於て當時松尾儀助氏の經營に係る起立商工會社小賣部に聘せられ氏が超群の技倆は忽ちにして時の支配人たる執行弘道氏の認むる所となり更に同社の卸部に轉じ同年京都に於て濱岡光哲氏等の創設せる關西貿易會社が紐育なる工商會社卸部の業務を買收するの擧あるや氏は直ちに新會社の人となり爾來同社に在るや殆と十年であつた、偶々家嚴重陽氏漸く衰老を加へ且つ兩眼を失するに及びたれば氏は膝下奉養の念自ら禁ずる能はず暫く航外の念を斷ちて明治二十八年斷然關西貿易會社を辭し一時閑散の人となつた。

氏が關西貿易を去るや當時三井家の巨豪中上川彦次郎氏が人材を四方に求むるに急なる一見して略ぼ氏を同銀行調査課に聘するの約を爲さんとせしが森村市左衛門氏は同業貿易の關係上其の關係せる小名木川綿布會社工場卽ち現今の富士紡績工場の支配人として氏を招聘せんことを期し人を介して其懇望を通ぜられたれば氏大に其知遇に感じ更に中上川氏と協議の上三井家も株主たるの關係ある事とて遂に小名木川綿布會社に入ることとなり爾來殆と一年、其間工場監視の實を擧げんが爲め一時家眷と別れて單身工場内の狹小なる社宅に起臥し苦心百端頻に社業を既倒に回さんと謀りしも當時社内綿纏の事情と時運の大勢紡績染織等の諸業に利あらず流石に快刀亂麻を斷つ名士も心窃に思へらく快腕一揮涙を呑んで冗員を陶汰する快は則ち快なり然れども損を轉じて益と爲すの望無き以上、一時の革新は偶々以て衆怨を買ふの愚を行ふに過ぎずと卽ち一日森村氏を訪ふて赤心の存する所を披瀝し

終に辭意を漏せしに膽大にして溫顏なる森村氏は靜思一番終に氏の辭職に同意し且つ曰く、今日會社の爲めに君を失ふは遺憾に堪へざる所なりと雖も社會は他方面に君の活躍を望む事甚切なるものあるべし國家の爲め余は何をか言はん云々と附言せられたりと氏が森村翁に信せらるゝの厚き以て知るべきである。

此時に當り紙卷煙草「サンライス」の製造家として聲名轟々たる村井吉兵衛氏は三顧の禮を以つて氏を本店なる村井兄弟商會の理事兼總支配人に擧ぐるに至つた是れ氏が畢生の敏腕を振ふの第一歩で時に氏、三十三歳。

氏が入社當時の村井商會は言はゞ草創時代にて僅少の機械と狹隘なる工場とに晝夜唯だ々々製造品の多きを竟ふのみ隨つて執務上何等の秩序規律を存せず爲めに社會の信用も亦未だ重きを爲すに至らなかつた、於是秩序の成立を謀り同時に廣く人材を四方に求め所謂適材を適

所に配布せる一方には機械の增設工場の新築等財政の許す限を盡して大に善良なるヒーロー、サンライヌ等の製品を供給するに勉めたれば米煙會社の輸入に係る「ピンヘット」、「オールド」等の製品は殆んと顏色なく斯くして村井商會は氏の入社以來未だ二年を出さるに長足の進步を遂げ其賣揚年額實に四百萬圓を以て算するに至つた其急激なる發達の程度は社會一般特に金融上密接の關係ある各市の銀行業者を驚かすに至つた。然るに今迄斯業の駿々たる發展を默視しつゝありし、時の政府は其原料なる米產葉莨を以て將來の好稅目とや見做けん從來五分の關稅なりしを數月を期して急に之を三割五分に增課するの法令を發し尙數月の後、內地葉莨同樣、更に之を專賣法中に組入れ殆んと十割前後迄に增課の目論見なる由を聞込たれば、此機逸すべからず見越輸入の商略は商會の運命を賭するも必ず之を遂行せざる可からずと爲し商議忽ち一決卽ち氏は吉兵衞氏の義弟村井眞雄氏と共に明治三十

一年秋末を以て大々的葉莨買入の爲め米國に渡航し三ヶ月間に數百萬圓の買收を遂げた、其間氏の劃策苦心は玆に之を叙せざるべきも此葉莨買入こそ取も直さず世界の煙草王たる米煙會社と遂に握手合同するの序幕を開いたもので果せる哉煙草王「ヂユーク」は一は村井商會の爲めに米國煙草產地の市場を攪亂せらるゝを恐れ一は我國に於ける米煙會社輸入品の高率なる課稅を受くるに惱み氏が紐育滯在中突然會見を申込、眞雄氏と氏に說くに合同製造の相互に利益ある點を以てした、其翌三十二年氏の眞雄氏と共に歸朝するや直に煙草王「ヂユーク」の意思を吉兵衞氏に告げ且つ大々的輸入葉莨の金融に就て大に苦慮する處あり誠意を三菱銀行の豐川良平氏に告げて一擧三百萬圓の融通を得其他三井銀行を筆頭として百有餘萬圓の融通を得るに至つた、これ實に氏が籌謀經營の結果である斯くて明治三十二年六月遂に吉兵衞氏を伴ふて再び紐育に至り裁斷流るゝが如き「ヂユーク」氏と共に對話

折衝の結果同年末に至り村井吉兵衛氏を社長とせる資本金壹千萬圓「後千二百萬圓に增資」の株式會社村井兄弟商會は京都に於て始めて成立を告げたのである。

氏の吉兵衛氏に侍して煙草王と共に合同談の歩を進むるや煙草王「デューク」は氏を役員中の重位に置かんとするや氏諄々と其不可なるを說き强いて自己の俸給を減じて之を吉兵衛氏兄弟に配割した、又「デューク」は氏の爲めに合同の盡力に對する報酬を豫約せしめんとしたるに氏は答へて曰くそれ合同に盡したるは一片吉兵衛氏に酬ゆるためで、始めより金錢の爲めに左右の意ありしに非ずと氏の廉潔玆に於て躍如たるものがある。

其後氏は村井商會の取締役文書總長として專ら社務統轄の任務に當り尙ほ村井本店の東京に移轉せる以來新に外資を輸入せる大阪瓦斯會社の取締役ともなりて實業界に錚々の名を成すに至りしが明治三十七

年煙草業の官營に移るや村井商會の解散と共に同商會の重役店員多くは四散することとなり氏も亦吉兵衛氏と別れて重に千代田生命保險會社の監査役を勤め且共同火災保險會社の創立に盡力せしが明治三十九年森村組に特別任務を擔當するに及んで前後二回家眷と共に紐育に往來し其森村組を去るや暫く閑散の地位に在りしも明治四十二年五月越後長岡市に於ける寶田石油株式會社整理の聲社會の一隅に喧傳せらるゝや村井吉兵衛氏は同社大株主たるの故を以て遂に敏腕なる氏の再起を促すに至り氏も亦決する處ありて同社の專務取締役と爲り爾來殆んと一年氏が一身の利害を顧みず只管寶田會社の整理に渾身の精力を集注して其成績大に見るべきものあつた。

明治四十三年春以來、久しく義弟石川清君の經營せる石川合資會社の輸出入業を監督し其成績頗る見るべきものありし爲め明治四十四年十二月一日村井吉兵衛氏は其同族と共に出資者たるに至り爲めに社名

を明治貿易合資會社と改稱し氏自ら代表社員となり石川氏は常務理事たりしが後同會社を資本金壹百萬圓の株式組織に改め氏自ら其取締役社長となり石川氏を常務取締役として業務は歐洲の大戰と共に非常の發展を告ぐるに至り大正五、六兩年中は最も好成績を擧げた此外、氏は千代田生命保險相互會社、千代田火災保險株式會社、及村井汽船株式會社の孰れも取締役にして又株式會社村井銀行及臺東製糖會社の監査役である。

氏、事を爲すに綿密周到而も迅速にして黽勉倦まず頭腦亦頗る明晰にして只管巧言令色を忌み其言語自づから簡潔なるが故に人往々氏の冷酷を言ふ者あるも是れ全く氏の眞情を知ざるの誤評にして氏の友義に厚く特に後輩を庇護するの信義に富み能く親戚故舊に忠なるは知る人ぞ知る其の一たび滕を交へて親しく氏と談論するあらんか恰も駘蕩たるの春風に接するが如く一種の溫情溢るゝものあるが如きを看取す

る事が出來る。

東京火災保險株式會社常務取締役
東京建物株式會社取締役　小松林藏氏

鳥海山麓の一寒鄕、一條の小天地より崛起し舊莊內藩出身の代表的人物として現代に飛躍したる氏が或時同鄕の一友に語つて曰く「余の徑路豈誇るに足らんや、余の今日ある敢て萬人に卓越せる力量、手腕あるにあらざる也、唯鰻登りに登り詰めたるのみ」と。

小松氏の此言を聽けるその一友なる人著者に謂ふて曰く「小松君は以つて鰻登りと謂ふも余の觀る所を以つてすれば彼れの今日ある所以のものは一面事に當りて周密細微、殆んど遺漏なく所謂其の計畫たる水も漏らさぬ點あると同時に、一度起つて實行に從ふや神敏快速電光石火の如き慨あり、此の兩面の併有兼備こそは卽ち彼れの今日ある所

以のみ」と。

氏は實に政界の偉人星亭に見出されたる丈けの人物とてその歴程にも亦た運命の數奇なるものがあつた、先づ是れを物語る前に暫らく氏の幼少時代に筆を起さなければならぬ。

小松氏が文久三年八月、夏の眞盛りに呱々の聲を擧げたのは前記一條の地(飽海郡にあり松嶺に近き一寒驛)で其家は農業で村會議員であつた小松又兵衞氏の二男として生れたのであつた、幼少志を海軍に抱きたるも體格檢査に於いて不合格となり、爲めにその志を伸ぶる事が出來なかつた、然れどもその英才は早く鄕黨に認められ飽海郡の俊秀留學生に選拔せられ郡費の補助を得て東都に遊學する事となり、十六歳蹴然笈を東都に負ふた。熊谷直太、佐藤鐵太郎、田中一貞、三矢重松氏、等も亦た同時代の東都遊學生で尤も幼年であつた田中氏の如き屢々諸友相會する毎に質屋の使番や豚買などに追廻はされた事は猶ほ

話題の一つとして殘されて居る。

さて氏は初め早稲田大學の前身たる東京專門學校に學びたるが後中央大學の前身英吉利法律學校に轉じた、然るに氏は當時、社會の大問題たりし祕密出版事件(谷干城氏の建白書を主とし當時名士某々等の建白書を祕密に印刷した問題)に關係した、是等の關係者は何れも早稲田、中央大學の生徒等であつたが一朝事現はるゝや囚はれて獄に投ぜられた、早稲田專門學校生徒六七名、英吉利法律學校生一名であつた、一名とは卽ち小松氏其人で、是れ實に事の發覺と同時に決して母校より罪人を出さずとなし、自己一人の罪に歸したのである、其の毅然たる男性的俠氣に至りては實に氏の面目を發揮して遺憾なしと謂ふべきである。

遇々氏の獄中にあるや巨人星亭と室を同じふし日夕時事を談じて交り甚だ深く、星亭が氏の人と爲りに信賴する所も實に少なくはなかつ

た、於是獄を出づるや星の家に假寓し後その紹介で東京火災保險株式會社に入社し書記となつたが、月給僅かに七圓であつた、併し乍ら是れ實に氏が實業界に飛躍した第一歩であつた。

書記より副支配人となり、更らに支配人に進み累進して理事に擧げられたが此間或は大阪支店長として名古屋支店長として、又仙臺支店長として保險業發展の爲めに努力し奮闘した是れより先天津に於ける日本專管居留地は明治三十一年の設定に係るものなれどこれを放任し徒らに狐狸の巣窟同樣の觀を呈しつゝあつた、當時北淸を視察せられたる故近衞公、故水野遵氏等これを遺憾とし日本の體面にも關するより速かに經營に着手すべきを唱導したるより政府は明治三十三年二月在外國帝國專管居留地特別會計法の發布となりつづいて帝國專管居留地經營事務所官制の發布となり、先づ第一着として日本專管居留地の經營を見るに至つた、於是天津日本專管居留地經營事務所は明治三十

三年度より土地の經營に着手し、其地上に建物すべき建物の經營に就ては現東京建物株式會社重役男爵武井守正氏及び故名村泰藏氏の盡力に依り政府に提出せられたる方案を妥當とし直ちに當時の外務大臣たりし小村伯爵の容るゝ所となり第一期の土工經營完了地は東京建物株式會社に拂下げられたるを以つて安田善次郎氏は一大英斷を以つて二百萬圓の巨資を投じ該事業に從ふ事となつた。

而して此一大新設會社であり安田八社中の大建者である支配人として北淸の天地に偉業を試むる選に當るは何人であらうかと八社の社員は飛耳張目これを待つた、中には自選候補者さへも出現したが安田翁は悉く是れを斥け、小松君を適當と認む君行つて遣つて呉れと白羽の矢は氏の頭上に下つた、小松氏答へて曰く余や東京火災の微々として振はざる當時に入社して今日を見る、今これを棄てゝ去るに忍びず、況んや余の如き無爲の才をして此の大任に衝り克く其の職責を果たす

べけんや、殊に建築事業に於いて余は何等の經驗をも有するにあらず是れ却つて此の事業を過らしむるもの、翼くば此の方面に適當なる人材をして其の局に當らしめられよと、是れを聽ける安田氏曰く「君の言尤も也、然れども東京建物と東京火災は姉妹會社也、東京建物の大株主は卽ち東京火災にあらずや、然らば東京建物の興敗は卽ち東京火災の向背に關す、今其妹の大事に臨み姉として豈傍觀するを得んや、故に君の東京火災保險會社理事の職は是れを其儘とし東京建物株式會社の支配人兼天津支店長として二年間にて宜しければその任に就かれよ」と、遂に氏も決する所ありこれを諾したのである。

氏種々の送別會を悉く辭退して曰く「余にとりて此行豈名譽ならむ果して此の重任を果たし得るや否や、唯事に當りて正直、勤勉、熱心を以つて一貫するあるのみ」と、而して僅かに三種の送別會のみはこれを辭する事が出來なかつた。卽ち一は東京火災の送別會である、此

の大事業の企劃に當り、その主任たる人を東京火災より出だしたる事は會社の名譽である故に祝賀會を開くにより君もその一員として列席せられたしと、氏已むなくこれに列席した、又安田善次郎氏の送別會には相互懇談する必要もあるので出席し、今一つは莊内館の送別會であつた、氏は此送別會には進んで出席し後進一同と膝を交へ「諸君余は大任を帶び將さに新事業の爲めに渡清せんと欲す、余は熱心、勤勉正直に余の大任に向つて努力する以外に余に何等の方法なし、而して余に若し誤りあらば諸君は思ふ儘に余を責められよ、鞭韃の勞をおしみ給ふ勿れ、而して此新事業その緒につくの時再び諸君と共に祝盃を擧げんのみ」と。

天津に於ける專管居留地の事業は、實に容易のものでなかつた、殊に當時天津を悲觀するもの丶言として「天津は白河の水利によつて維持されて居るのに、白河は年々其の水深を減ずるを以つて、近き將來

に於ては全く其の水利を失ふであらう、それに秦皇島が不凍港なるに加へて、秦皇島から北京に至る通洲鐵道が開通する曉には天津は到底存立する能はず」と、樂觀者は又曰く「天津は決して白河の便不便により、斯程までに影響を蒙るものにあらず天津は北京に於ける唯一の貨物集散地であるから、白河よりするも、秦皇島よりするも一度は必らず天津を通過せねばならぬ、殊に背後に北京なる消費地のある限りは決して悲觀するに及ばぬ」と。而して氏は調査の結果斷案して曰く「北清商業上に於ける天津の地位が、北清の將來といふ問題より推論するも、決して悲觀すべきにあらず」と、結論したるが當時又伊集院總領事（現伊太利大使）の鼓舞激勵ありしを以つて氏は躊躇を排し痛心を除き爾來幾多の難關を突破して茫々たる居留地に一大日本村を實現し今日各國の居留地に比し毫も劣るものなき繁賑を見るに至つたのである。

而して大倉組も當時又天津專管居留地内に建物建設の事業を起し天津起業組合の名に於て盛んに經營して居つたが遂に東京建物株式會社との間に合同の議あるや氏その交渉に當り萬難を排して遂に合同を實現し五百萬圓の大資本に於て活動する事になつたのであつた。

「當時氏は是れによりて巨萬の富を得たるが如く解しものなきにあらずと雖もそは氏の人物を知らないからである、氏は東北人の性格を帶びて居る、而して一種の俠義と、大義名分の爲めには眼中利害がない氏が二年の約束で渡清に決するや營々努力の結晶によりて漸く購ひ得たる牛込榎町の家屋を賣飛ばして出發した如き氏の人物を遺憾なく立證するものである、安田翁これを聽きこれを以つて社員操縦の訓話に代用すること屢々であつた、氏の資性は實に斯くの如く竹を割つたやうな淡淳と磊落と、大義名分の爲めには何ものをも抛げざる秋霜烈日の氣慨とそれに親分の如き大襟度がある、所謂吹けば飛ぶ輕薄なる現

代才子と天地の差があると同時に今日の羊頭狗肉主義のメッキ紳士と向路を別にして居る、流石に星亨流の大きいタイプが氏の全身に流れて居るのは何人も了解する事が出來る。

氏や、幼少末だ志を得ずして酒田の敎員養成所にあり、その卒業試驗に際し酒田の鄕社日枝神社に參詣し冥福を祈つた事がある、その志を得るや先年歸省して再び社前に額づき深く神助の加護を謝し數百圓を寄進した、又一條村はその誕生地なる關係上財團法人の區會を起しこれに巨額の金を寄附しその利子を以て消防、社寺の修繕等の事に充てしむる等謝恩の志に薄からざるは又其の獨得の天資であると思はれる、その莊內館の建築の如き自ら設計し監督し金をおしまずこれを補助し設計の如きは稿を改むること七回にして初めて着手し今日の如き完全無缺に近き設備を見るに至つた。

吁氏や幼少齋藤美澄氏(海軍豫備中將矢島純吉氏の兄)の爲めに指導

を受けて小學敎師となり、蠻的克く屈し、星亨の爲めに見出されて社會的第一歩を試み爾來三十年七圓の薄給より大會社の重役(年收約三萬圓)となりて社會に盡し、事業に盡し鄕黨に盡し、自己も亦た名を成し、功を遂げ、家に巨萬の富を起し現代に飛躍するに至る、而してその人物公平無私、正廉誠實、誰れか此の先輩を畏敬するに足らずといふものあらむ。而して吾人は此の機會に於て此の先輩の如き眞に社會重要の人物たらんことを鄕土の後進に切望するものである(了)

合資會社文古川商店代表社員　實業家　堀　健藏氏

三歲にして桑梓鶴岡を出で春風秋雨三十二年、三十五歲の少壯を以つて文古川商店を主宰經營し東西の實業家と相呼應し斯界に活路を開拓し洋々たる將來を有する健藏、堀氏は果して如何なる歷程をか辿れ

る。

氏は學習院教授堀惟孝（同氏譚參照）日本郵船株式會社々員堀悌藏（同氏譚參照）兩氏の令弟である。

氏は明治十八年乙酉七月を以つて呱々の聲を鶴岡鷹匠町に擧げた、前記の如く三歳鄕土を辭し長兄に伴はれて福島市に出で漸く長ずるや福島小學校に入りて初等教育を受け、後長兄の金澤高等學校に教授として赴任するや氏も亦た金澤に出で進んで中等教育を金澤中學校に受け孜々五年是れを卒つた、然るに此間不幸病魔に侵され、久しく山水の間、煙霞の裡に療養しその漸く治するに及んで北越の天地を辭して笈を東都に負ひ十九歳、卽ち明治卅七年を以つて青山學院に入り、明治四十年是れを卒業するに至つた。

氏の校門を後にして活社會の人となるや商業を以つて起たんとし斯界有名商店の一たる佐野商店（東京京橋區三丁目二十二番地、輸出入

貿易業）に入りて先づ其の第一歩を試みたのであつた、寔に佐野商店は氏の實業界の一大修練時代でこゝに奮鬪する事三年であつた、是れより氏は斯界の業務について漸く究むる所あるや、本邦貿易業の中心地とも謂ふべき横濱港に出で山下町百六十七番地に文古河商會を起し貿易業界に立つた（貿易對外國は米國及埃及を主とし雜貨の輸出、鐵物、器械、鐵葉等の輸入）是れより氏は佐野商店を辭して專心同商會の經營に努力奮鬪し、着々その礎地を築くに至つた、大正八年十月に至り、アリソンバーナー販賣株式會社（資本金五十萬圓、石油自働車及び自働車附屬品販賣）を組織成立するに至つた、アリソンバーナー會社の特色とし且つその强味ともいふべきは從來我邦に於て試みられたる事なき石油を燃料とし疾走する自働車で該自働車はその製造方法たる新創見にして該自働車により石油を使用して動力とする時は從來自働車に於いて使用するものゝ三分の一にて足れる經濟上に於て頗る

有利なものである、自働車の社會を現實し其の發動原料の經濟に力めつゝある今日の趨勢より推して此の新たに提供せらるべき新會社の石油自働車が如何に歡迎せらるゝかは著者の言を加ふる必要もない。該會社は氏が時勢先見能力の發揮ともいふべきものであるがその重役たる事を一切辭し黑幕の人として活動して居るに過ぎない。

鈴木商會主と氏とは尤も深き交誼を有する關係上鈴木氏の渡濠中東京本店を預りその支配人として現に統禦せられつゝある。蕭洒たる貴公子の如き風貌、典雅なる態度、鄉土氣質の微塵もなきは幼少その鄉を出でたる爲めなるべく寸刻もその歩をゆるむる事なく進歩しつゝある斯界に出沒しつゝある少壯實業家の氏には凡ての素質が具備せられて居るやうに見えた。氏の如き盖し末測の洋々たる將來を有する人であらう。

財團法人 莊內館 監督 **佐藤雄能氏**

同鄉の士佐藤雄能氏を評して曰く、

榮達、名利を求むる事なく、所謂椽の下の力持として鄉土の後進者を誘掖提撕すること二十年、幾多の英物人材を養成し、これを以つて樂しみとし、是れを以つて天職とする彼れの如きは黃金滔々主義に魅せられた現代の珍である。と、

氏は慶應元年五月を以つて舊莊內藩鶴岡町に呱々の聲を擧げた、嚴父は新右衞門、氏十八九歲同藩々士佐藤家を繼ぎ佐藤姓に改めた、是れより先朝陽小學校に學んだ、同期生には齋藤九兵衞、若松久米吉、秋保親正の諸氏あり、又下の級には熊谷直太(同氏譚參照)佐藤鐵太郎(同上)堀維孝、犬塚勝太郎の諸氏があつた。

後山形師範學校に入りて之れを出で更らに、笈を東都に負ひ早稲田專門學校(早稲田大學前身)に入り行政科に專攻し、明治二十三年是れを卒業した、氏同校を卒はるや一時文筆の人と爲りて衣食し後日本郵船株式會社の社員として職を奉じたるも其の志にあらず、卽ち幾干もなく桑梓に起臥し自適の人として山水に放浪して居た。

明治廿八年中、熊谷直太、赤谷辰郎、富樫良三、若松久米吉、加藤幹雄高山樗牛の諸氏相會し後進指導の目的を以つて莊內館設立の議ありしも纏るに至らず翌廿九年熊谷直太氏莊內に歸省するに及んで此議再生し、若松久米吉、秋保親正、熊谷直太、犬塚勝太郎氏等の盡力により、齋藤九兵衞、齋藤三郎右衞門(後山形縣選出代議士となる)兩氏借家料負擔を承諾し、氏は是れが監督に擧げられ再び東上して同鄉の先輩日向光俊氏(貴族院議員日向三右衞門氏の養父)の所有する本鄉區元町二丁目の家屋を借り受けこゝに漸く莊內館なるものゝ發芽を見る

に至つた。此の時代を長屋時代と稱して居る、その漸く規模を擴張するに及んで一下宿屋を買潰して後進學堂となしやゝ面目を一新したる感があつた、而して斯くの如き時代を送る事七八年、此の時代を古下宿屋時代と謂つて居る、大正四年二月に至り現在の地本鄉區元町二丁目六十六番地、に百七十七坪に亘る二階建の建築を起し、小松林藏氏の如き最も斡旋努力する所あり、設計圖の稿を改むること七回にして漸く工事に着手し遂に完全無比の財團法人莊內館を實現するに至つた。

聽く氏は一度莊內館の監督に就くや館內の一室を以つて其住居、居室に充て後進と共に起臥し家眷を鄉里に住ましめ、獨身經營實に二十年に及び、家族一同と共に生活せらるゝ事になつたのは僅かに此二三年前からである。此間良父となり、良師となり、滿腹の慈愛と謹嚴なる態度とを以つて指導提撕し兩者の間殆んど父子の如く、志を得て現

に各地に散在する館友は上京すれば必らず氏の溫顏に親しみ、同宿時代の舊友消息を聽くを以つて唯一の樂しみとして居るといふに至りて師弟父子の間人情紙の薄きが如き現代の一奇蹟である、曾て氏茨城縣下水海道に在る館友を訪ねたる一事を莊內館報告に揭載するや水を北と誤植した是れを讀める北海道の館友等は北海道に來り乍ら自分等に通知なかりしは何故ぞとの不平やら質問が續々同館に舞込むといふ狀態であつたといふ、又氏は一年中大半鐵道院より各地に出張する途次到る所に館友を訪ふと、館友等は喜悅滿面是れを迎ひ是れを遇する至らざるべき狀態であるが氏の一友は此事を知り「君は損な男也、料理屋に飲みてこそ酒はうまけれ人妻に酌をして貰つて何がうまいか」と氏は微笑して答へなかつたのであらう。

氏の指導し養成したる青年が位置を得、榮達して家庭とつくりこれを恩人に見て呉れといふ所に彼等後進には無限の喜びがあり、是れを

見る所に氏の口づけする酒は甘く而してうまくなければなるまい。

吁氏の如き莊內の一至寶、自らは榮達名聞を棄てゝ一に後進の成功に盡しつゝあるその高風蓋し眼中黃金名利以外何ものもなき徒輩の學ぶべき所であると共に、氏の如き人物を有する莊內後進は羨むべきかな。

氏一面鐵道院に職を奉じて寸暇なく又一面莊內館の事に當りて繁劇又譬ふべからず、而かも此間二十年の年月を費し苦心慘憺株式會社會計、鐵道會計の二著あり、兩者共先人未發の見ともいふべく株式會社會計の如き七版に達して居る。又屢々鄉土鶴岡の新聞紙に莊內に關する意見、時事、漫錄、批評の如きを寄書し常に鄉土の文化開發に努力せられて居る(了)

明治生命株式會社營業主事　俣野景藏氏

舊莊內藩より崛起し一は東京火災保險株式會社の常務取締役として活躍し、一は明治生命保險株式會社の營業主事たる保險界の双璧、是れを小松林藏、俣野景藏の兩氏となさなければならぬ、曾つて四條畷に小楠公神社設立の義擧を天下に呼號しこれを實現したのは俣野景孝氏であつた、彼れは或は政治家となり、或は官界に奮鬪し、數十の會社創設に參與して重役となり、以つて實業界に活歩し生涯を擧げて國家の爲めに貢献した、此の奮鬪的人才は實に本譚當面の人俣野氏の長兄である、而して中兄は卽ち俣野時中氏である、時中氏は特異の人物氣宇濶達抱負遠大初め司法省法律學校に入り、後法相松室致、故櫻井一久、犬養毅、河村讓三郎氏等と交はり、後司法官として拘束せらるる

ゝの煩を壓ひ業將さに終らんとして新聞記者なり、法典錄を發行した(憲法の解釋講義錄の如きもの)後又北海道に赴き開墾事業に從事し、極北の地に歿した(鈴木幾彌太氏傳參照)

氏は實に斯くの如き人々を兄として文久二年月鶴岡町に呱々の聲を擧げた、抑も俣野家は莊內藩士として相當の格式を維持し來ること二百年、嚴父五郎太夫、景敏氏に至つたのである、さて景藏氏長ずるに及び朝陽小學校に遊びこれを卒業するに及んで故鄕に止まること數ケ月感ずる所あり、蹴然辭して笈を東都に負ひ慶應義塾に入りて學び是れを卒業した、當時鶴岡方面より東都に來りて學ぶもの甚だ多からず醫學博士栗本東明氏を初め先輩は寥々曉星の如き感があつた。

氏學塾を後ろにし初めて社會的舞臺の人となるや先づ先輩の提撕に依り、當時創業幾干もならず微々として振はざりし明治生命保險株式會社に入社し是れより大保險會社の一員として奮鬪する事となつた、

是れ實に明治二十三年二月であつた、是れより氏は惑はず及迷はず一意專心明治生命保險株式會社に在りて我邦生命保險事業の爲めに貢献努力至らざるなく、遂に今日あるに至つたのである、而して此の間の徑程を記せば或は京都支店長となり、更らに名古屋支店長となり大正六年を以て遂に同社營業主事に擧げられ我邦大保險會社としての實務主腦として重きをなすに至つたのである。

想ふに氏の歷路を回顧するものは何等の奇もなく、怪もなく、迂餘波瀾の妙味はあるまいが、此の平坦なる一條の道こそは萬人進んで誤らざる所、殊に堅實なる事業に從事するものは猶ほ且つ斯くの如く終始一貫、右顧左眄せず、直往邁進するの必要がある。

氏は謹嚴にして一語一句も苟しくもせざる人、自らを奉ずること薄くして他に厚く、公正無私誠實を以つて斷じ、誠實を以つて行ふの人である、

佐藤雄能氏曰く「莊內藩より出て居る、俣野兄弟、鈴木兄弟、三矢兄弟の如きは寔に莊內の三兄弟出世鑑といふべきもので推奬するに足るものである、殊に俣野長兄の如きは死して猶ほ事業の殘れるもの少なからず云々(了)

合名會社保善社横須賀埋立管理所主任
帝國醋酸株式會社々長
日本耐火窯業株式會社取締役
日本金線製鋼株式會社相談役
丸菱炭鑛合資會社々長
吾妻炭礦株式會社社長
丸菱荷札合資會社代表社員
丸菱合名會社代表社員

五十嵐　淳氏

五十嵐その人の歷路を按ずるに彼の南阿の偉人セシルローズの活動史と酷似するものあり、ローズ病弱事に耐えず、倫敦の大學を棄てて

南阿弗利加に赴き、炎天蠻煙の間に活動し遂にダイヤモンド坑の發見後絶倫の精力、不眠の大活動を續けて世界的大事業家としての偉業を遺した、當面の人五十嵐氏は慈惠醫學專門學校を出で、病魔の囚ふる所となり横臥三年遂に醫書を擲つて國家的大事業に猛進し、或は財閥安田と握手して横須賀灣頭に大商港を拓き、或は青島に出沒して丸菱興業會社を計畫し、南船又北馬、その企劃し、實現するもの悉く國家事業にして永遠的生命を有するものである、卽ち事業ありて眼中利害ない、由來世を擧げて國家的事業家の輩出寥々曉星の感ある時、東田川の一村本郷より氏の崛起を見る、將さに一奇蹟といへば奇蹟である今氏について記述する所あらしめよ。

舊莊内藩東田川郡本郷村の舊家五十嵐家こそは、氏が明治十三年四月呱々の聲を擧げた誕生の處である。五十嵐家は實に六百年以前々續き來つた稀有の舊家である、現に存在する家屋は六百年の星霜を送り

來つたもので、古の面影をその儘に殘して居る、昔此方面より酒井家に納むる年貢米は此の家で斗り直して納められたもので、その建築材料を見るに鉋の無かつた時代とて、手斧で削つて居るに徵してもその如何に古いかといふ事が容易に立證される。

斯くの如き舊家であるから歌麿、廣重等の錦繪とか書畫、刀劍、骨董の類は紀念多い此の家の昔を無言の裡に物語つて居る、それに代々好學の士出で、殊に氏の祖父は非常の藏書家で又讀書家であつたから奇書珍書數多く保藏されて居る。

氏の嚴父は甚之助、母堂は壽和子(同郡山添村の舊家より出づ)、氏は長男で安吉(五十嵐家を繼承す)今朝吉の二弟があつた(今朝吉氏早く鄕黨に頭角を顯はし父母に養へて至孝、小學校及び實業補習學校に敎鞭を執り、村内に盡せる治蹟頗る多かつた、後第一高等學校入學受驗準備中、天此の一大英才に年を藉さず溘然として逝いた、その偉大

なる將來を期待する村民等は深くこれを悲しみ、生前の治蹟を顯彰せんが爲めに相計りて遂に此の一青年に對し尨大なる頌德碑を建立した、斯くの如き擧も多く聽かざる所であるが學生中斯くの如き治蹟を遺せるものも又聽かざる所である。

長男たる氏は初め本鄕小學校に入り、初等敎育を受くるや、その明敏屢々敎師を驚かし二級を飛び越したることもあり、何時も優秀にして初等敎育及補習科を終つた、これより志を醫學に樹て鶴岡に出で、開業醫上野璋氏に師事し仔々斯學の道に努めて居たが、間もなく東都に出で外國語學校夜學部に入學して獨逸語を研究しついで東京慈惠醫學專門學校に入り同校を卒業した。適々盲腸炎に罹り爾來又起つこと能はず、順天堂病院に入院して大手術をした。吁、一箇の醫師として將さに活社會に出で憫れむべき弱者に福音の手を伸べんとする人が病魔に囚はれて起つべからざるに至りては是れ實に人生の大悲慘事でな

くてなんだらう、併し攝養の限りを盡したる甲斐ありて氏が肉體は復活した。是に於いて斷然聽針器を擲つて新生涯に入り新天地を開拓する事に決した。

是れより先き横須賀市會議員等の連合政府當局に出願してその認可を得たる七萬坪の横須賀新公鄕の埋立事業は同市在つて以來の大事業でもあり同市多年の懸案でもあつた、然るに船頭多くして船山に登るの例に洩れず、權利者間に軋轢葛藤を生じたる結果、遂に是れを氏に讓渡する事となつたのである。是に於いて氏は此の權利を手中のものとして大正二年以來不眠不休の活動を以つてその埋立工事の業をつゞけた、それ大小を論ぜず、一業を遂ぐる事は容易の事でない、殊に埋立事業の如き海を變じて陸とする所謂人、自然を破壞し、人、自然をつくる大事業である、幾多の蹉躓困難伴ひ易く、今日まで斯業に於いて成功したる例甚だ少なく、何れも失敗の歷史をとゞめて居る、され

ば氏が此の事業に對しても亦同一の百難相ついで起るを免れなかつた、然れば初めは到底成す能はざるものとして嘲笑に付せるものも氏が着々として成功の緒に就くを見るや羨望禁せざるものあり、或一派は卽ち財源問題に於いて氏の事業を防害し、或一派は卽ち權利問題を以つて迫害し、或一派に至りては到底氏の頑强不撓の活動に對抗する能はざるを見るや最後の手段たる暴力に訴ひ不逞の徒を使嗾し、匕首を煽して迫り來るの狀態であつた、然れども氏や一度事に當る、敢てその目的、敢てその初一念を貫徹するまでは紛々たる毀譽や褒貶を顧みざる事業家的資性を有す、腕力に對抗し、金力に對抗し、四面楚歌東西悉く敵を控ひつゝ其の事業を進め、其の漸く事を完成せんとするや、安田氏の經營する一千萬圓の資金を有する合名會社保全社と提携するの約成り、氏は一萬六千坪の利權を獲得し、該事業の管理所主任として活動して居る。今やその事業十分中二分を殘すのみとなり、曾

つては激浪逆捲く海洋は茫々たる平地を實現し、而して該埋立地には一大商船を自由に横着けにすることを得る卽ち正式の商船港を築造しつゝありて、その防波堤の完備より、荷揚場の工事と急ぎ今後二年を經れば軍港を兼ねたる一大貿易港を現實するに至るべく、而して此埋立地方一帶の將來は所謂同港の銀座にして、神戸に於ける海岸通とも いふべく、中央は浦賀、三崎に通ずる縣道なる故八間幅の人道車道に區分せられ、理想的の文明市街を見るに至るのである。抑も横須賀港たる從來純然たる軍港にして大商船の横付不可能なるを以つて軍艦に供給する食料其他の物品は一度これを横濱に送り、横濱の手を經て供給するか、或は鐵道の便を籍るが如き不利不便の點擧げていふべからざるものあつた、加之横須賀港の地たる、坂、谷、凸凹し最早此上一戸の家屋をも增設する餘地なき狀態にある際、此の埋立地の成功は實に新横須賀の創設であつて今後七萬坪を以つて新市街形成の曉に於い

ては同市として一新紀元を開くものである。されば埋立地の地價暴騰今や一坪數十圓以上の聲を聽くに至つた。而しで病餘の氏が絶倫の精力を割ける埋立事業の成るや更らに氏の眼光は一轉した、丸菱合名會社の企劃卽ち是れである、今丸菱合名會社の內容を略記すれば斯うである、同社は靑島に於て歐州戰前獨逸ヨゼフ、シャイトハウエル氏が經營せる建物敷地鐵工所を買收是れを經營し、又山東省の主要物產たる鹽、牛皮、牛骨、牛油、落花生油、桐材、小麥、豆油等を靑島より內地又は米國に輸出し、英米製造諸機械器具、鐵材料、建築及工業用材料木材、枕木、雜貨等を靑島に輸出販賣する事業にして今や其の規模を大にし更らにこれを三百萬圓の株式組織に改め日ならず中日興業株式會社の名稱に變ぜんとす、而して同社の使用權を有する鹽田百五十町步を基礎とし更らに同地が大貿易港なるに係らず唯一の船渠すらなきにある狀態を看破しこゝに船渠業をも包含し將來一大會社を實現

する豫定である。

想ふに將來吾國が產業に若くは貿易に於いて大發展を實現するの地點は卽ち支那そのものにして丸菱合名會社の活動的使命の重要なる事は更めて呶々の言を要さない所であると同時に少壯實業家として偉大なる運命を負ふ氏が隣邦大陸の活動は尤も期待せらるゝものの一つである。

而して氏の事業は獨り此の二大事業にあらざる也、卽ち磐城平附近の炭鑛を經營しこれを丸菱炭坑と稱し群馬縣吾妻炭坑を基礎とし卽ち吾妻炭坑株式會社を經營し、その社長となり、或は荒井泰治氏と共同し一百萬圓の資金を以つて三年以前より宮城縣登米郡內の伊豆沼排水事業を企劃し旣に事業地二郡七箇村の調印を終り主務當局の認可次第其の工を興さんとしつゝある、又日本耐火窯業株式會社(伊賀上野)の事業を贊してその重役となり、或は日本金線製鋼株式會社の事業を

助けて相談役に推薦せらるゝ等その有力會社の重役たる事、實に十を越ゆるに至つた、而して氏は又丸菱荷札合資會社（目下株式組織の變更中資金壹百萬圓）代表者である。由來日本に於ける荷札は其の製品種々ありと雖も一貫四五百目以上の斤量に耐ふるものは殆んど皆無にして是れが爲めに貨荷物の紛失、行方不明となり、鐵道院は年々巨額の損害を見るに至り、運輸業に從事するものも又荷札の不完全なる爲めに同一の損害を負擔する事枚擧に遑がない、此時に際し野田某氏の發明に係り、パテントを得たる荷札はその製造方法に於いて從來荷札に比し一頭地を拔き鐵道院に於いて實驗の結果實に五貫目以上の斤量に耐ゆる破格の例を示し鐵道院は該荷札を以つて指定荷札として各運送業者に使用せしむる事となつたのである、是に於いて氏は此の有益にして國家的なるに着眼し合資組織を以つて丸菱荷札合資會社を起し目白、大井町、巣鴨新田等に工場を新設し日々數十萬枚の需要に應せ

んが爲め夜を日に繼ぎ、工場の增設、業務の擴張等に忙殺せられて居る、蓋しこれを以つて鐵道院は巨額の損害を減じ、運輸業者は以つて紛失過誤の紛擾煩鎖を免れ、斯界を裨益し、國家を利益する處蓋し尠少にあらざるべく、斯くて又荷札界の一大改造を現出するものであらう、而して氏は又山形、福島、岩手の三縣下に材料を求め廢物を利用して醋酸を製造する帝國醋酸株式會社の社長として科學工業界に努力し、或は自働煽風器の發明をなすものあるや是れを後援して斯界を風靡するに至らしめた、此發明は世界的の發明で南洋、臺灣、支那各方面よりの注文到殺製造に忙殺されて居る。

想ふに氏の將來はいざ知らず、現下に於いて氏の關與する事業を根據としてこれを通覽する時は氏の所謂「余は事業を主とし利害は第二の問題なり」といふ定論に一致しつゝあることを首肯せなければならぬ、彼の利益にさへなれば業の何んたるを問はざる黃

金沼々主義に墮せざる氏の面目は後進事業家に執りても又一指針たるを失はないではあるまいか。

氏の一度決心してその事業に着手するや、毀譽褒貶紛々たる四圍の批評の如き素より顧る所ではない、何んとなれば氏はその決心に至る迄はこれを國家の趨勢に照らしこれを社會的に考慮し決して一身の利害を打算せざるので卽ち信ずる所を行ふからである、而して其の初一念を貫徹せる曉に於いて初めて他の紛々たる毀譽を顧るのである、所謂その爲す所、行ふ所世の紛々事業家とその行路を異にして居る點に氏の事業が何れも失敗すること能はざる哲理を包含して居るのである。

吁、氏や曾つては順天堂病院一穗の寒燈下、命旦夕に邉るの病兒であつた、其の一度一身を挺し大業に當るや邁往奮勵遂に萬人期待して行き易からざる圈内に雄飛するに至つた。又偉なる哉。

海軍少將 海軍軍令部參謀第二班長 中里重次氏

舊莊内藩内より崛起して我邦海軍の巨星として重きをなすものは實に是れ海軍中將佐藤鐵太郎、海軍少將中里重次の兩氏である。

此の二星は舊莊内藩の至寶として崇敬せられて居る事はこゝに多言を要さないところである。然らば少將は如何なる歷程を辿れる、乞ふ少しくこれを物語らしめよ。

少將は明治四年八月、夏の眞盛りを以つて莊内鶴岡五日町片町に呱々の聲を擧げたのであつた、嚴父は重威、長兄は重吉、氏は二男であつた、抑も中里家は酒井公の初代より奉仕し代々前記五日町片町に棲居せられた舊家で實に三百年を經過したものとして知られて居る、舊莊内藩でも三百年の歷史付き舊家は他に一二戸あるに過ぎない。

さて少將漸く長ずるに及び朝陽小學校に入り（下等八級などゝ稱せ

る時代）現に鶴岡三日町眼科醫武田泉五郎、同町醫師伊藤恭太郎、國學院教授三矢重松、彫刻師小林誠義諸氏と共に初等教育を受け、ついで莊內中學校に學ぶ事一年、後山形市に出で山形師範附屬小學校に學びついで山形中學校に入り更に進んで笈を東都に負ひ海軍兵學校に入つた、是れ實　明治二十二年の事である、氏が如何なる動機により海軍界に向つ　是れより先氏の山形師範附屬小學に在るや同小學の教授山下新力氏（山下大將の長兄、工學士山下壽郎氏の父）の教育を受けたる關係上屢々當時の海軍少尉たる源太郎氏の遠洋航海談等を又聞きし又東都に於て軍令部に奉職せる叔父太田氏の薫陶に依り氏の希望は自然此の方面に注がるゝ事となつたのである、明治二十六年海軍兵學校を卒業し遠洋航海練習艦に搭乘し、南洋方面に航海の豫定を以て布哇に在泊中東學黨事件の爲め本國歸還を命ぜられ、横須賀に歸港し、浪速艦に轉じて日清戰爭に從事し、翌廿八年戰役中少尉に進み、

後横須賀砲術練習所に入り、更らに比叡に乘じ遠洋航海練習艦附きとして米國に赴むき、これを了ゆるや適々廣島灣內の海海軍小演習に參加した、演習中一夜水雷艇氏の搭乘せる比叡と衝突したる爲め水雷艇は忽ち大渦を描いて沈沒した、此突發事件發生するや氏は水雷艇の救助作業の爲め身を躍らして艇內に飛び込んだ、暫くして艇を釣りたる數條の大索切斷し艇は眞倒に水底深く沈んだ、此時此際一條の麻繩で强く胸部を擊たれ其儘氣絶して水底に吸込まれしも、幸にして再び水上に浮揚せらるゝと共に救助せられ軈て蘇生したといふ事である、ついで中尉となり、更らに大尉に進み、海軍大學に入り是れを卒はるや明石艦砲術長となり、更らに轉じて海軍兵學校教官となり、明治三十六年には同校卒業生と共に遠洋航海練習艦に乘じ沿岸航海の最中日露戰役を見るに至り橋立艦の砲術長となり三十八年五月十七日の日本海々戰に參加して奮戰し同年六月常磐艦の砲術長に轉じ同年十一月海軍

々令部參謀となり在職一年、更らに海軍省軍務局に轉じた、明治四十一年英國駐在を命ぜられて渡英し四十三年の冬に至りて歸朝し練習艦隊副長として濠洲に赴むきこれを了はるや再び海軍軍令部員となり、更らに海軍省軍務局員となり、日獨戰亂起るや三度海軍々令部參謀第三班長に轉じ大正五年より大正七年七月まで再び海上の人となり遠洋航海練習艦隊磐手艦長として貢獻し同年八月又々海軍々令部參謀となり遂に今日あるに至られたのである。

由來米澤は海軍國の稱に背かず幾多の軍星相踵いで起つて居る、然かも莊内に至りては將官級に於いて佐藤、中里、兩星を觀るのみである、於是吾人は莊内の後進諸子の奮起を促してやまない、日本は海の日本である、海は日本の興廢を主配して居ると謂つてもよい、卽ち海軍が日本の興敗を主配して居るとも謂ひ得るのである。斯くの如き意義ある海軍に吾莊内後進の興廢參與することは鄕土の誇りとすべきのみ

ならず、日本として心强い限りである。莊内の至寶とも謂ふべき中里氏の一傳を記述するに當りこれを勸告して置く次第である。(了)

陸軍一等軍醫正
從五位勳四等功五級

莊司守之助氏

氏は慘憺たる苦學、堅忍不拔の意志、一警察官より嶄起して陸二等軍醫正となり、從五位勳四等功五級を綬けられた。

慶應二年九月十三日を以つて山形縣飽海郡松嶺町に呱々の聲を擧げたのは氏であつた、嚴父惣次郎氏は戍辰の亂に際し莊内藩と共に行動せる松嶺藩毛呂太郎大夫の組下に屬し秋田に向ひ前進して長濱村に至るや一夜敵の襲ふ所となり奮鬪惡戰組長と共に戰沒した、時に氏僅かに三歲、母と共に父の生家莊司惣右衞門方に於いて生育した、維新後秩禮を奉還するに及び親族會議の結果。母堂に後添の夫を迎へ養父と爲し後見養育せられた、養父は農商を業とする人であつた、明治七年

松嶺小學校に入り同十三年課程を終はり酒田中學校に入學せしも家政不如意を以つて中途退學し晝は家事を手傳ひ、商農に從事し夜は私立正心學校に於いて漢學を修めて居た、明治十五年頃より家運甚だしく悲境に陷り晝夜家業に努力するも幼弱なる弟妹多く、家計益々困難を見るに至つた、是に於いて勃々たる意氣を藏する氏は後事を養父に一任し蹴然家鄉を出で他方面を觀察し世運に乘ずるの機會を捉へんことの必要を感じたが、飛ぶに羽なき鳥と同じく旅費なくして苦慮數年、偶々商用を以つて酒田町に赴き、北海道巡査募集の掲示を酒田警察署門前に見るや大に心動き、思べらく北海道は未開の地、青年の活動地として此地を措いて他にあらずとなし、直ちに警察署に出頭しその希望を通じ當日身體檢査を受け父母の許諾を得、ついで學科試驗に合格し北門の天地に向つた、時に明治二十一年、氏が二十三歳の時でこれ氏が社會的の第一歩であつた。

同年十一月函館教習所に入り課程を卒へて函館警察署に勤務したが二十三年七月脚氣に罹り一夜の内歩行不能となり醫師の勸告を受け轉地保養の目的で海路故鄉に歸り父母の手厚き看護を受け治癒し其年再び北海道に赴き、前職を繼續したが病餘の氏には感慨の禁ぜざるものあつた、それ人生の悲慘は病魔にあり、自己は以つて苦痛に呻吟するのみならず、他人の心をも惱まし、遂に社會の厄介者として萬事休するの己むなきに至るは比々皆然らざるはなし、若しそれ是れを救濟するの道あらば蓋し人を益し社會に貢獻する所少なからざるべしと、是に於いて斷然醫學を志し明治二十四年一月函館警察署内紛擾發生せるを好機として二月九日辭職し友人吉川金藏(法學志望者)と共に笈を東都に負ふたのであつた。

氏上京後辛ふじて神田の一下寄に落着きたるも素より貯へあるにあらず、於是知己友人に依賴し醫師の雇主を尋ぬる事數ヶ月、而かも未

だ寄托する運びに至らず、此間某書店に備はれ諸新聞を集め毎朝荷車に積みて上野驛に疾走するの勞働に從事したる爲め脚氣病再發して就褥の身となり、進退谷まるの窮地に陷つた、是に於て醫藥を仰ぐの途なき氏は運を天に任せ專ら攝養に力めし甲斐ありて早く輕快に向つた、同年の秋芝區愛宕下町小村格氏の藥局生となり漸く素志の學問に親しむことを得た、是れより寢食を忘れ螢雪の苦、臥薪の慘を嘗め孜々勉學其功空しからず、明治二十五年四月內務省醫術開業前期試驗に合格し其夏小村氏の門を出で友人に寄食中肋膜炎に罹り三度就褥の止むを得ざるに至り、歸鄕療養をなし秋季に至り病癒ゆるに及び知己親族等の義擧にて僅小の學資を得上京して東京醫學專門學校濟生學舍に入り明治二十六年二月より七月迄東京顯微鏡院助手を勤め晝夜研學に餘念なく其年十月內務省醫術後期試驗に合格しこゝに一箇の醫師として苦學的結晶の光を放つた。

於是、明治二十七年二月より越後國見附町病院の醫員勤務中、日清戰爭の勃發に會した、男兒須らく君國の爲め骨を馬革に埋むるは此時にありとなし、陸軍省の軍醫募集に應じ同年九月陸軍々醫となり第一師團に屬して滿洲の野に從軍し步兵等十五聯隊附となり戰線に勤務を命ぜられ明治二十八年二月二十四日西七里溝の戰鬪に於て左腕に貫通銃創を受け野戰病院を經て蓋平定立病院に入院加療約四週間にして治癒復隊した、同年六月一日高崎に歸着、二十九年五月淸國威海衞占領軍に派遣せられ劉公島に駐在三十年五月高崎歸着、三十一年及三十三年の兩度長野聯隊區徵兵醫官となり、三十四年六月淸國駐屯步兵第四大隊附となり太沽駐屯十一月高崎に歸着、三十六年七月陸軍戶山學校附兼同校敎官となり三十七年日露戰役の起るや小倉第十二師團兵站軍醫部々員となりて同年二月韓國仁川に駐屯同年五月第三軍々醫部々員となる大連駐在、三十八年一月鴨綠江軍兵站軍醫部々員となり次で第

十一師團衛生豫備員長となり奉天戰爭に參加し所々に數箇の病院を開設した、明治三十九年二月善通寺に歸着、三月第四十四聯隊附兼高知衛戍病院長となり五月廣島豫備病院付九月廣島衛戍病院附となり十月再び步兵第四十四聯隊附兼高知衛戍病院長となり四十年二月步兵第二十二聯隊附兼松山衛戍病院長となり四十四年四月南滿洲派遣隊に屬し旅順に駐在大正元年九月豫備となり、十一月松山に歸り次で東京に出で代々木に開業するに至つた。

氏苦學を以つて人と爲り社會に雄飛したるに止まらず、佐々木重元氏(吹浦の開業醫)莊司久吾氏(山形步兵第三十三聯隊附陸軍步兵大尉)同左男治氏(農學士)同高吉氏(旭電球株式會社)の四弟に學費を供し養成訓育一日も怠る事なく遂に今日あらしめた。吁一人として世に處し他に卓越する事既に容易ならず、而かも氏や不斷の苦學三度の病難と惡戰し幾多の財政難、飢餓、疲勞と奮鬪してその目的を達し四弟をし

て人と爲さしむ、人の爲さざる所を爲す、眞にこれ男兒の面目である鄉土後進の士須らく本譚を玩味指鍼に供するを忘るゝ勿れ。

住友倉庫東京出張所々長　**角田貫次氏**

學習院敎授堀惟孝氏(同氏傳參照)曰く。

『余と角田氏とは所謂竹馬の友である、尤も角田氏は明治七年生れ、余は明治元年二月生れで七歲も違つて居るが今日迄も舊誼を續けて居る、角田君は詩人で文章家である、其の詩に造詣の深き、その能文なるは稀れに見る所であるが非常の謙遜家で人格の崇高、人物の立派な事は君の見らるゝ通りで僕の敢て多言を要さぬ所であらう』と。

寡言沈默の堀氏の一言一句は金鐵よりも重い。

貫次、角田氏は明治七年九月を以つて呱々の聲を鶴岡町に擧げた、

祖父は柔嘉氏、藩の家老、致道館々長たる事もあつた、嚴父は鶴岡藩士にして儒者たる辻俊次氏(辻家より角田家に入婿し角田姓に改む)で現に七十九歳の高齢を保つて鄉土莊内に起臥せられつゝある、その著に古書讀例なるものあり(二十二字詰二十行五十枚綴のもの二十六冊あり)全部漢文で目下貫次氏の手で出版の準備中である、該著は苦心五十年の星霜を積んで漸く脫稿せる稀有の著述で學者の高等研究に資する古學の深奥を闡けるものである。此の篤學者は前記の如く七十九歳の高壽に達せられて居るが鑊鑠として壯者を凌ぎ、今猶ほ讀書三昧勉學に餘念がない、近年は年毎に避寒を兼ね年暮より必ず上京し耆宿に往來し或は圖書館に付き研究し居られる。曾つて貫次氏の次弟海軍大佐貫三氏が一週間の休暇を得て鎌倉に歸つた時これに遭はんが爲めに嚴父俊次氏は東京に出で其の甥に當る莊内館監督佐藤雄能氏方に宿つて居たが三日の中二日半を圖書館に暮らし東京見物一つせずに歸鄉

せられたのには何人も唯驚く外はなかつたと謂ふ事である。

氏は實に斯くの如き人を父として明治七年九月呱々の聲を莊内に擧げ、幼少朝陽小學校に學んだ、日本銀行出納局長水野重也氏は實に小學時代の同期生である。これを卒業するや進んで莊内中學に學び、後山形に笈を負ひ山形縣立中學校に轉じて學び、これを了るや仙臺に出で、第二高等中學校(第二高等學校前身)に入つた、然るに幾干もなと病魔の浸す所となり業を續くること能はず、恨を呑んで校門を後ろにし桑梓に起臥し山水の間に自適した、其の病漸く癒ゆるや再び鄉を辭し金澤に遊んだ、時に竹馬の友たる堀惟孝氏は金澤第三高等學校の教授であつた、(北條時敬氏校長時代)是に於いて氏は堀氏と舊交を暖め北條氏を知り、誘液せらるる所少なからず、後一年志願兵として第二師團第十七聯隊に入り除隊後再び北條氏を廣島に訪問し同氏の斡旋にて住友倉庫の草鹿丁卯次郎氏に紹介を受け同氏の盡力で住友倉庫員

なり爾來努力奮鬪同事業に貢獻し累進して同社東京出張所々長として今日あるに至つたのである。

住友倉庫東京出張所は今や大阪の本社につぎ、發展澎張し新たに五層樓の大倉庫を建築する豫定で着々其の準備中にある、五層樓の大倉庫は倉庫事業の創設以來初めての試みであると同時にその規模に於いて、その內容に於いて我邦倉庫建物中最も高大なるものであらう、想ふに嬴弱學を中ばにせる氏が一度住友倉庫に入るや努力奮鬪、一は住友家の事業澎張に多大の貢獻を致し一は以つて自家の向上を實現するに至つた、是れ實に氏の德望、手腕、人格の兼備と又その勤勉と莊內人の共通性ともいふべき建實性の持續がこれを然らしめたと謂ひ得るではあるまいか。（了）

村井銀行庶務課長　芹澤友吉氏

氏は天童藩內に呱々の聲を擧げた、明治貿易株式會社長松原重榮氏の實弟で芹澤家を繼ぐ、初め天童小學校に及び明治十七八年頃東都に笈を負ひ三島中庸氏の二松學舍に學び漢學の素養を受く、後明治二十年頃明治大學に入りて法律學を專攻し卒業後村井氏の經營する煙草會社に入り、京都の本社に奉勤し後神戸、東京支店等に轉勤し又村井銀行に轉じ明治三十七年庶務に轉じ現に同課々長として努力せられ居る。（了）

兩羽之現代人　終

大正八年一月十五日印刷
大正八年一月二十日發行

東京市牛込區東五軒町七番地
編輯兼發行者　古山省吾

東京市小石川區西江戸川町廿一番地
印刷者　竹廣豐

東京市小石川區西江戸川町廿一番地
印刷所　東京印刷製本株式會社

東京市牛込區東五軒町七番地
發行所　兩羽研究會
（電話番町八九五番）

不許復製

トエ1R-42

388
197

終